

セッション「自然法、共和主義、啓蒙」(2011. 10. 29) 世話人 田中秀夫

司会者 奥田 敬 (甲南大学経済学部)

報告者 田中秀夫 (京都大学経済学研究科)

討論者 佐々木武 (東京医科歯科大学名誉教授)

1975年にフォーブズの『ヒュームの哲学的政治学』とポーコックの『マキアヴェリアン・モーメント』が出版された。ヒュームの個別研究である前者は自然法思想に関係があり、後者はマキアヴェリに発する近代の共和主義の系譜を発掘するものであった。ともに18世紀の啓蒙思想に力点を置く作品であり、ケンブリッジ学派の業績である。フォーブズはケンブリッジ大学の政治思想史の担当者であった。ポーコックはこの時期にはすでにアメリカで活躍していたが、彼の学問的基礎はケンブリッジで築かれた。

この両著作が示唆するように、この時期にケンブリッジで思想史研究の飛躍的な展開があった。二人に先駆けてロックとフィルマーのテキスト研究としてのピーター・ラズレットの仕事があった。またジョン・ダンのロック研究とQ・スキナーのホブズ研究も形を成しつつあった。彼らは個々の思想家の世界観や社会観も視野に置いていたが、思想を意図的な行為として把握し、その意図的な行為を再現するためには、テキストの背景と文脈(コンテクスト)を明確にしなければならないと考えた。すなわち、思想を階級、利益や心理などに一挙に還元するという分析に異を唱えたのである。それはマルクス主義やネイミア主義への批判を意味した。そういうなかで思想史の書き換えが進んで行ったが、啓蒙思想研究の転換もあったと言ってよい。それは研究方法の革新の産物でもあったが、決定的な要因は「共和主義」の伝統の再発見であった。啓蒙への共和主義の挑戦とでも言うべき事件が起こったのである。

イタリアにはヴェントゥーリがいた。彼は1960年代に大著18世紀の改革者を出版し始めていた。ポーコックはヴェントゥーリの影響を受けている。ヴェントゥーリは膨大な著作を残したし、啓蒙における共和主義についても先駆的な業績を持つ(『啓蒙のユートピアと改革』)が、しかし彼から思想史研究の大転換が始まったとは言えないであろう。啓蒙思想史の大転換をもたらした著作をもし一冊あげるとすれば、MM すなわち『マキアヴェリアン・モーメント』以外にないであろう。

このセッションでは、佐々木武氏と共同で、ケンブリッジ学派、あるいはケンブリッジの思想史研究の形成・展開過程を振り返りながら、そこで結実した成果を、今日の我が国の思想史研究がどう継承すべきかについて、議論を展開し、相互の認識を深めたいと考えた。参加者は20人程度であった。まず田中がフォーブズについて報告。佐々木氏がコメント。1時間でフロアとの討論に入る。北大名誉教授の佐藤会員から質問があり、水田会員から異論が出てから有益な議論になった。